

| | |
|--------------|---|
| Title | 日本昔話の構造と表現の研究 |
| Author(s) | 川森, 博司 |
| Citation | 大阪大学, 1997, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.11501/3129310 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

| | |
|---------------|--|
| 氏 名 | 川 森 博 司 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 (文 学) |
| 学 位 記 番 号 | 第 1 3 2 8 0 号 |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 平 成 9 年 4 月 11 日 |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当 |
| 学 位 論 文 名 | 日 本 昔 話 の 構 造 と 表 現 の 研 究 |
| 論 文 審 査 委 員 | (主 査) 教 授 小 松 和 彦 (副 査) 教 授 中 村 生 雄 助 教 授 荒 木 浩 助 |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本の昔話を、類型（形態論的構造）論、比較論、現場論、の三つの視点から解明しようとしたものである。本文は3部構成全9章と序・結論からなり、「日本昔話の構造分析」と題された第1部（全3章）が類型論、「日韓比較研究」と題された第2部（全3章）が比較論、「伝承の場の変容と語り手の現在」と題された第3部（全3章）が現場論、に相当する。枚数は約684枚（400字詰換算）である。

第1部第1章では、「共同体の検閲」（ボガトゥイリョフとヤコブソン）という観点に着目することで、昔話をはじめとする口承説話の資料をとおして民俗社会で暮らしていた人々の思想を読み解いていくための道筋を基礎づける作業をおこない、さらに「伝説」は民俗社会における具体的な人間関係や地名などを語り込むことによって民俗社会のなかに生じた日常性を超えた現象に説明を与え、「昔話」は民俗社会の人々の心の深層に働きかけることによって彼ら自身の認識のあり方を形成していくという、考察の前提となる大きな枠組を明らかにしている。

この枠組をもとに、分析の対象として、第2章では、異界と人間界の富の交換という側面から異類との婚姻を主題とした昔話群が、第3章では、富をめぐる隣人对立や兄弟対立、夫婦対立などの登場人物の対立を主題とした昔話群が取り上げられ、形態論的分析と考察がなされる。その結果、第2章では、民俗社会は自分たちの共同体の利益となる場合に異類を迎え入れ、そうでない場合は排除におよぶという特徴を析出し、これを民俗社会の「日常的秩序感覚」というかたちで把握できると指摘している。また、第3章の考察では、日本本土の民俗社会では隣人对立型の昔話が優勢であるのに対し、奄美・沖縄地方では兄弟対立型の昔話が優越しているという、話型分布状態をもふまえた形態論的比較・考察から、現代日本人にも通じる本土の人々の隣人への関心の強さを析出し、こうした隣人への関心の強さは、「憑きもの信仰」に見出される潜在的に対立する隣人関係とも照応するものであろう、と指摘している。

第2部では、第1部で示された日本の昔話の具体的素材が、これと類似した韓国の説話と比較される。まず第1章では、『韓国口碑文学大系』別冊の『韓国説話類型分類集』をはじめとする韓国における口承説話の分類方法を詳細に検討したうえで、日本の資料との比較のための基礎作業をおこなっている。第2章では、日本において「異類婚姻譚」としてまとめられている昔話群とこれに相当する韓国の「夜来者」説話群の比較・分析がなされ、その結果、日本の

昔話では、異類との婚姻は一時的なものに留まっているのに対し、韓国では異類の人間への変身をとおして恒久的な婚姻関係が打ち立てられるというきわめて対照的な特徴を示していることを明らかにし、この相違は、村落の閉鎖性と開放性の違いを反映するものではないかと考察している。第3章では、来訪者を歓待する者と冷遇する者が登場する、いわゆる「蘇民将来譚」系の日本の昔話群とこれと類似した内容をもつ韓国の「長者池」説話群の比較・分析をおこなっている。その結果、日本の昔話ではこのような対立を体現する登場人物が隣人関係にある者であることが多いのに対して、韓国では嫁と舅ないし姑という家族内の対立を具現化したような登場人物になっているという社会関係のあり方の違いを明らかにし、さらに、冷遇した者に対して神秘的制裁を与える来訪者の聖性の相違の分析をも合わせて試み、韓国の説話の場合では風水思想の影響が濃厚にあらわれていることを読み解いている。

第3部では、参与観察が可能な「現在の語りの場」から立ち上がってくる諸問題が論じられている。第1章では、柳田国男や関敬吾などの指導のもとでなされた昔話の採集・分類およびその歴史的研究という段階以降の主要な研究潮流であった、水沢謙一や野村純一などの「語り手論・語りの場論」を整理し、これらの研究が民俗社会の変容もしくは消滅によって失われていく「かつてあった囲炉裏の火の回りでの語り」の復元をめざすものであったのに対して、これからは「変化してしまった場こそを研究の対象」にすべきだ、と提案している。たとえば、昔話採集に訪れる研究者との出会いによってかれらに昔話を語り聞かせることに生き甲斐を見出すことになった語り手、ラジオやテレビに出演することが多くなった語り手、あるいは松谷みよ子などのような再話作品を媒介にして生まれた各地の「民話を聞く会」での語りなどが、こうした「新しい語りの場」に当たり、このような高度成長期以降の語りの現場の変容ないし再生のなかで生き続ける昔話の現在を明らかにすることこそ必要である、と主張している。

第2章では、地域おこし・観光商品としてとらえ直されて新たな「語りの場」を与えられた、岩手県遠野市における昔話とその語り手たちの現在についての調査報告がされている。そして、ここには、大都会の人々から与えられた「ふるさと」イメージを受けとめ、現代社会の価値観や物質文化を受け入れつつも、地域社会が受け継いできた伝統文化を状況に見合うかたちで現代生活に生かしていく、したたかな住民たちの姿を見出すことができる、と指摘している。第3章では、「語りべホール」（遠野市）において観光客に昔話を語って聞かせる語り手とこれを聴く観光客の双方へのインタビューとアンケートによりながら、語り手と観客たちにとって昔話が現在どのようなものとして存在しているか、という点を浮かび上がらせている。

「結論」では、フィールドワークにもとづく現場論的な研究と、すでに採集され語りの場を失ってしまっている膨大な昔話資料を前にしておこなわれる研究室での構造や表現様式などの理論的・分析的研究を結びつける努力を重ねることで、民衆の思想と実践をより実証的に明らかにすることができるという視点から、本論文のまとめと今後の課題が述べられる。

論文審査の結果の要旨

日本の昔話の研究は、柳田国男や関敬吾の指導によって全国各地に伝わる昔話を採集・記録し、分類し、それを文化史的観点から解釈する、というかたちでなされてきた。高度成長期以降、囲炉裏の周りでの語りという現場を失った昔話は、語り手の後継者をも同時に失うことになり、これにともなって、近年では、昔話研究は、採集された膨大な昔話テキストの分析からその伝承社会の性格や近隣諸国の昔話との文化史的・構造論的比較研究、あるいはいまではもはや記憶する人も少なくなったかつての「語りの現場」の復元、数少ない語り手のライフヒストリー的研究などに移行してきた。しかし、「滅びゆく民俗文化」というイメージで眺められてきたために、最近では、研究は袋小路に入って停滞しているという傾向があることは否めない。

このような研究状況にあって、本論文は、採集された昔話資料の類型・比較分析から出発しつつ、昔話が生きている現場を都会から離れた「僻地」に探し求めるといった従来の採集・研究方法を捨て、現代に適応しつつ生き続ける昔話の姿を観光施設などのなかに見出し、これを真正面から調査・考察した、まことに野心的な論文である。その主

要な成果は、つぎのようなものである。

まず第1に指摘すべきは、上述のごとく、従来の視点を反転させたかたちでなされた現場論的研究の斬新さにある。柳田国男の『遠野物語』や彼の指導を受けて多くの昔話・伝説集を編んだ佐々木喜善などの民俗学的成果を生み出す舞台となった遠野地方は、地域の活性化のために民俗学の成果を利用した自分たちの伝統文化の商品化を考え出した。しかし、民俗を前近代的な民衆の文化の枠内で理解しようとする研究者や民俗文化の商品化に否定的な意見を抱く研究者からは、こうした事態は民俗の墮落とみなされる傾向が強かったといえる。これに対して、論者は民衆の文化とは民衆の生きるための思想と実践であるという視点にもとづいて、昔話の語りの場の現在を観光施設のなかに見出し、その意義を現代文化の深部から抽出しており、高く評価できる。

第2は、このような問題意識に支えられて、「語りべホール」の昔話の語り手たちの語りを丹念に記録し、その特徴を分析し、観客に合わせて微妙に変容していく語りの実態を解明していることである。論者はこれを伝承の再創造というかたちで記述しているが、この調査記録は、内容は地味ながら、与えられた状況のなかで変容しつつ生き延びていく昔話の現場を巧みにとらえていて貴重である。なお、観光文化に関心をもつ研究者のあいだで好評を博した、国立歴史民俗博物館製作のビデオ作品『遠野民俗誌94/95』（1995）は論者の企画構成・指導のもとで製作されたものであり、この映像記録とセットになることで、本論文の、とくに第3部の意義がいつそう明瞭になる。

第3に、日本および韓国の話型論的比較研究から、日本の昔話の特徴として、異類との婚姻の非永続性や隣人との対立関係性を析出したことである。このような特徴の背景には、日本と韓国の村落の性格や来訪者観、隣人関係のあり方、家族・親族の編成の仕方の違いがあるのではないかという指摘は、まだ仮説の域を出ないが、日本の昔話の研究をする者にとって今後の考察の指針となるものである。また、世界に広く流通しているアールネ＝トムソン方式の分類とは異なる独自の分類法にしたがって韓国の膨大な説話を分類した『韓国口碑文学大系』を精査し、日本の分類法と比較しつつ、その利用法を探っている点も注目に値する。

もちろん、本論文にも、いくつか検討すべき問題がある。たとえば、論者は、日韓の説話の特徴を村落構造・社会関係のあり方の相違から説明しようとする傾向が強いが、さらに民衆の信仰や道徳などの精神面の相違にまで分け入って考察すべきであろう。この点が不十分であるため、考察がやや平板になっている感がある。また、論者は今後の研究方向を観光人類学的文脈のなかを探っているが、観光という対象は、観光する側とされる側の緊張関係のなかにあると考えられるにもかかわらず、本論文ではその点の認識が十分になされているとはいえない。この点についても研究の深化が求められる。さらに、論文構成上の問題として、本論文が論者のこれまでの既発表論文を中心に編まれているために、初期に属する論稿からなる第1部は、第2部、第3部の議論の内容と比較したとき、その前提としての位置を占めているものの、先学の研究の見解に依存している部分が目立っており、本論文の作成にあたっては多少しふくらみをもたせるための努力を惜しむべきではなかったと思われる。

このように、今後に残された諸点はみられるが、本論文は昔話研究において新しい地平を切り開いた注目すべき業績であり、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。